



附属小のマスコット・キャラクターが決まりました！平和で一人一人が輝く学校という願いが込められています！

令和5年度 附属小学校だより

スマイル³ふぞく



第7号 令和5年11月28日（火） 校長 古野 祐一

子供が動くと学校が変わる！

「自分たちの学校は、自分たちで創る」という、スマイル附属が大切にしている言葉があります。子供たちの発想やチャレンジが、自分たちの学校に対する愛着と誇りをもたらしていきます。素敵な活動をいくつか紹介します。

図書委員会児童は、読書フェスティバルを企画しました。本の紹介コーナーの設置や読書ビンゴ、全校読み聞かせ等を実施し、読書の秋をアイデアいっぱいに出演してくれました。

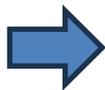
運営委員会児童は、挨拶で学校を明るくしようと、9月に続いて挨拶カードを改良しました。おかげで名前を付けた気持ちの良い挨拶の声が響く、活気ある11月をもたらしています。

栽培委員会児童が植栽してくれたパンジーやビオラが、玄関や花壇を彩っています。また、その花が咲き誇る姿を想像しながら水やりを続けているのが、5年生の花ボランティアのメンバーです。もちろん植栽も頑張りました。水やりによって花の生命力を感じ、咲き誇る花の様子を楽しんでいるのが伝わります。私が、この子たちからもらった感動は、片付けにもあります。次に使う人のことも考え、ホースを丁寧に巻き取っています。当初は時間がかかっていましたが、各々の役割が分かってきた今は、協力して素早く美しく仕上げて帰ります。物を大切にすると、人も大切にできると、経験から分かります。スマイルの種が、こうして芽を出し広がっていることを嬉しく思います。

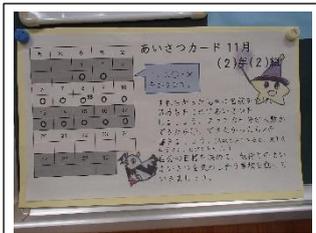
全国給食甲子園がライブ配信！

前回お伝えしました第18回全国学校給食甲子園の「調理コンテスト」が、YouTube 配信されることになりました。山崎栄養教諭と給食調理員の川元リーダーは、同僚の協力を得ながら放課後の調理練習に励んでいます。全国の12代表が競う12月10日（日）の決勝は、10:00開始です。長崎伝統野菜を大切に保存し、広げたいと願う多くの人たちの期待を糧に頑張ってほしいと思います。都合があえばぜひ、応援をお願いいたします。

YouTube ライブ配信 QR コード



図書委員会が行った集会室での読み聞かせ。



運営委員会が考えた11月の挨拶カード。



水撒き後にホースを丁寧に片付ける5年生。



新品のように巻き取られたホースリール。

※裏面に続きます！

北斗の感動

給食後の食缶は、どの学級も空の状態で見捨てられます。残食は無く、多い日でも全体の0.1%の200g、全校でご飯茶碗一杯分です。環境省の調査によると、給食残食の全国平均は、6.9%で、年間一人当たり7.1kgの給食が廃棄されているデータがあります。「給食は完食し、食缶は空で返す」という本校の給食文化を物語る数字です。

ここには、食べられる量を子ども自身が決める取組や、食べる時間を確保するために、配食を合理的に行う工夫、調理員さんの苦労や喜びに触れる学習などの全校的な指導が生きています。

そして、北斗の子体夢の「長崎伝統野菜」の取組や家庭科の「達人から学ぶ」食の学習など、食育の充実を図る山崎栄養教諭との学びの展開も、子どもが食べる喜びに気付くきっかけとなっています。

心を育む北斗の給食

給食時間には、こんな姿も見られます。自分で決めた量を食べ切れた仲間を讃える声。時間内に全員が完食できた時の拍手。給食時間が学級経営の安定と関係づくりにつながる姿です。

放送委員の子どもは、食事の時間をずらして、校内放送で給食時間を彩ってくれます。放送を聞く態度で、委員会の子どもの取組に応えます。

後片付けの時間は厳守です。自分の後には仕事をしている調理員さんがいることを意識します。給食時間にも相手意識が子どもの姿に表れます。

食器の返却は丁寧に挨拶を添えて、ご飯の日は、食缶に軽く水を注ぎ、側面の米粒を落とす。ものへの関わり方は、人との関係づくりです。

給食は、「心を育む」大切な場となっています。

教頭 橋田 晶拓

未来で輝く北斗の子

ルールは誰が作るのか

卒業を控えた中学3年の2月、私が通っていた中学校では男子の丸刈り規制がようやく廃止されました。そして高校入学時の学級集合写真には、新しいクラスメートが輝かせる数々の流行ヘアスタイルの中に、同じ中学校出身の中途半端な「伸び坊主頭」が並ぶこととなります。当時でさえ化石と言われそうなこの丸刈り校則に、何の疑いもなく従っていた頃を懐かしく思い出します。

「ブラック校則」という言葉が話題に上がってずいぶん久しいですが、そもそも校則やルールとは一体何でしょうか。他方、いわゆる「超難関校」と言われる日本有数の進学校では、制服規制から頭髪の制限に至るまで、校則らしい校則はほとんどなく自由であるというのも有名な話です。

先日、子どもたちに、ルールについての考えを問いました。すると、ほとんどの子どもたちが、やはり「ルールは多いより少ない方がいい」と答えます。

本来「ルール」というものは、必要に応じて新設されたり淘汰されたりするものです。すべてのルールには生まれた背景や意味がありますが、逆にルールのない自由な世界では、一人一人が自力で秩序を保たなければなりません。

個人の主張や個性の多様化が積極的に認められる昨今、もはや「ルールだから仕方ない」は通用しない時代です。しかし、ルールがないと他人様に迷惑をかけてしまう人が少なからず現れてしまうのも現実です。

一人一人がその意味を考え、不必要なルール撤廃を主張する代わりに責任についてもしっかりと果たしていくことが、本当に生きやすい世の中を創ることだと、子どもたちと共に確認しているところです。

主幹教諭 才木 崇史

教えから学びへ

学び方を学ぶ

子どもの主体的な学習を推進していく上で、子ども自身が、どのように学習を進めることが効果的であるかを学んでいくことが大切となります。学習成果を上げるためには、一定量の学習時間に加え、学習の仕方を工夫することが必要となるからです。そこで、子どもが学び方を学んでいくことができるようにするために、次のようなことに取り組んでいます。

まず、子ども一人一人の違いに応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を設けることです。一人で考えたい、友達と話し合いたい、パソコンを使って調べたい等、個の思いが生きる効果的な学習方法を選択・判断する場により、多様な学び方を体験することができるようになっています。

次に、授業や単元の終わりに、「今日どんな学び方をしたか」等について振り返る場を設けることです。学びのプロセスを分析することで、例えば6学年では、次のような学び方のよさを見いだしてきました。

- 分からないときには友達や先生の説明を聞く
- なぜそうなのか図や式で説明をかく
- 解いた問題の解説用ノートを作る
- 問題を作り合って解き合う

これらを蓄積し、目的に応じたより効果的な学び方を選択する際の材料となるようにしていきます。

授業改善と学習改善を両輪として、学習成果を最大限にする方法を追究していきます。

教務主任 松尾 勇哉